

281 出血性内膜病変における細胞像とその内分泌環境

関西医大

梅崎圭吾, 寺西二郎, 西川正博, 中島徳郎,
榎木 勇

〔目的〕出血を初発症状とすることの多い子宮内膜癌早期発見のスクリーニングに於ける内膜スミア採取の実施は, 増殖性病変から癌への発生解明を含めての期待にもかかわらず, 多大の成果を揚げるに至っていない. その原因の一つとして, 細胞形態判定への基礎的なアプローチ不足が考えられる. そこで子宮内膜に直接の影響を与える性ステロイドホルモンと細胞形態像との検討を行なう為に, 細胞診, 組織採取, ホルモン測定を同時に行った.

〔方法〕出血を主訴として来院し, 明らかに妊娠が否定され, 子宮内腔より出血している症例を対象として, 大部分を増淵式吸引法, 一部エンドサイト法にて内膜スミアを採取し, 同時に組織及び肘静脈血よりのエストラジオール(E_2) 値を測定した. また出血のない器質的に正常婦人の各月経周期及び閉経期各 5 例を対照とした.

〔成績〕機能性出血 36 例, 子宮筋腫 37 例, 内膜増殖症 6 例, 異型増殖症 1 例, 内膜癌 2 例その他 20 例で閉経前 88 例, 閉経後 14 例であった. これらの E_2 値は閉経前症例で約 1/3 例において月経周期での正常値より離れており, 特に排卵期, 黄体期においては低値を示し, 閉経後症例では対照例より高値の傾向であった. 細胞診結果では閉経前 E_2 低値症例に偽陽性を, また閉経後の E_2 高値例で, 集塊の小型化, 細胞の大型化, N/C の増加及び核クロマチンの増量及び粗大化と軽度な異型性が比較的多く認められた.

〔結論〕閉経後出血性内膜病変での細胞診核所見と末梢血エストロゲン濃度には関係があり, 内膜増殖症の発症が示唆された.

282 子宮体癌における DNA ploidy の検討

近畿大

南條 亨, 永井 堅, 澤井 猛, 渡部 洋,
池田正典, 野田起一郎

〔目的〕flow cytometryによる体癌のDNA ploidyの解析を行い, 臨床進行期, 組織分化度, 筋層浸潤の程度, 腹腔洗浄液細胞診の結果ならびに長期予後との関連について検討した. 〔方法〕体癌症例 31 症例について手術摘出標本のパラフィン包埋ブロックを用いて, Hedleyらの方法に準じた検体処理を加え, FCS-I型 flow cytometerにより腫瘍細胞の相対的核 DNA 量を測定した. 〔成績〕検討した体癌 31 例中, 8 例 (25%) に DNA aneuploid (以下 AP) を認めた. 臨床進行期との関連では, I 期が 9%, II 期が 13%, III 期が 50% の症例にそれぞれ, DNA・AP を認めた. 又組織分化度との関連においては, G₁ 例 20%, G₂ 例 25%, G₃ 例 40% にそれぞれ DNA・AP を認めた. 筋層浸潤との関連においては, 筋層浸潤が 1/2 未満の症例では 21%, 1/2 以上の症例では 36% と, それぞれ DNA・AP を認めた. 術中腹腔洗浄液細胞診との関連では, 陰性例の 15%, 陽性例の 63% に, DNA・AP を認めた. さらに長期予後との関連について, Kaplan-Meier 法を用いて検討した結果, DNA・AP 例は, DNA diploid 例に比較し, 長期予後は不良の傾向にあった. 〔結論〕①体癌全症例の 25% に DNA・AP を認めた. ②臨床進行期が進む程, DNA・AP の頻度が高かった. ③分化度が低くなる程, DNA・AP の頻度が高かった. ④筋層浸潤が深い症例において, DNA・AP 症例の頻度が高かった. ⑤ DNA・AP 症例は, DNA diploid 症例に比較して長期予後が不良であった.